感謝場面における韓国人大学生の言語使用
ー応答ストラテジーを中心にー

呉恵卿 (国際基督教大学教教養学部)、金明熙 (駿台外語＆ビジネス専門学校)

１．研究目的

韓国語の感謝場面におけるこれまでの研究は「感謝の表明」に重点が置かれており、「感謝表現への応答」はあまり注目されていなかった。本研究の目的は、感謝の挨拶を交わす場面で、韓国の人々がそれぞれどのような言語表現を駆使して相互行為を行っているのかを、感謝表現に対する応答に焦点をあてて分析及び考察を行い、韓国語学習者が適切な言語表現を使ってコミュニケーションができるよう手助けすることである。

2. 先行研究

韓国語における感謝への応答を取り上げた研究は最近になって少しずつ出てきてはいるが、その数は非常に少ない。なお、先行研究でも述べているように、現在韓国語教室で使われている学習教材は、感謝場面における応答に関連して実際の言語使用を十分反映していない(김영채 2016、박은영 2000、변우영 2007)。感謝への応答を取り上げたこれまでの研究でも、感謝の場面や状況など、談話ストラテジーの選択において重要とされる要素はあまり反映しておらず、各場面において実際どのような表現が使われているのかに関する具体的な記述や分析も行われていない。本研究は、これまでの研究をさらに発展させる形で、社会的地位、親疎関係、負担程度などの社会的要因を考慮した DCT を韓国人大学生に実施し、場面や状況に応じて、韓国人大学生は感謝表現に対してどのように応答しているのかについて記述及び分析を行う。

3. 調査の概要

韓国人大学生は感謝表現に対してどのように応答しているのかを調べるために、特定の状況でどのように回答を行っているのかを自由に書くアンケート形式で DCT(Discourse Completion Test)を実施した。2017 年 6 月 12 日から 6 月 23 日にかけて、釜山に居住する韓国人大学生 40 人を対象に DCT データ収集を行った。被験者の 40 人のうち 29 人が女子学生、11 人の男子学生で、年齢は 19 歳から 24 歳となっている。

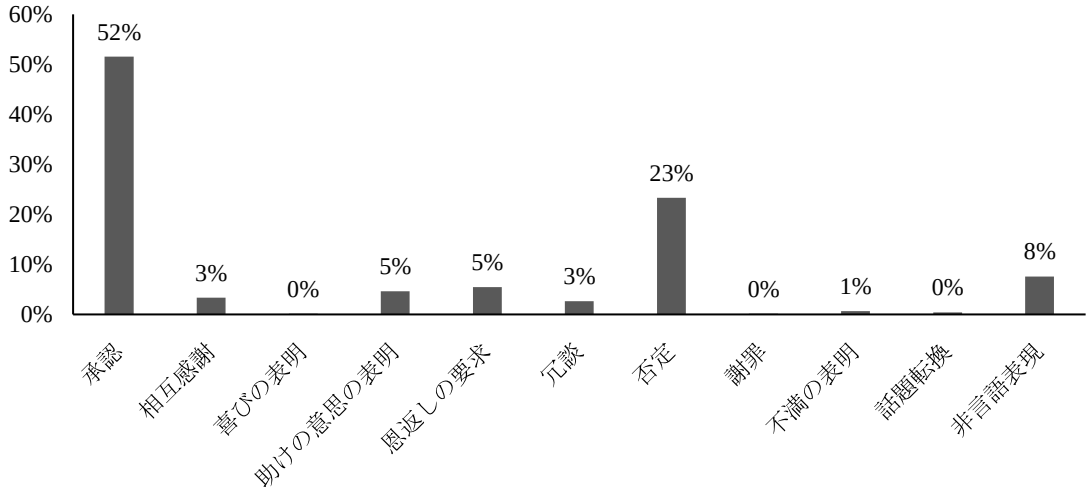
DCT の内容を構成するにあたって、Coulmas(1981)の「感謝の対象(the object of gratitude)」

を参考にし、感謝応答の状況を＜場面Ⅰ＞「自分からの好意で恩恵を施した場合」と、＜場面Ⅱ＞「相手からの依頼で助けてあげた場合」に分けて設定した。感謝応答の状況は、大学生の日常生活の中で想定可能な場面を設定しようと心かけた。さらに、同じ場面でも社会的要因が感謝ストラテジーに与える可能性を考慮し、それぞれの場面を「社会的地位」、「親疎関係」、「負担程度」の 3 つの要因に分け、全 18 問の質問を作成して DCT 調査を行った。

4. 分析

4.1 感謝場面における韓国人大学生の応答ストラテジー

感謝場面で韓国人大学生に多く選択されている応答は、承認(52％)＞否定(23％)＞非言語表現(8％)＞助けの意志の表明=恩返しの要求(各 5％)＞相互感謝=冗談(各 3％)＞不満の表明(1％)の順であった。そのほか、ごくわずかではあるが、話題転換(3 名)、喜びの表明(1 名)、謝罪(１名)も応答ストラテジーとして選ばれていた。



＜図１＞ 感謝表現に対する韓国人大学生の応答ストラテジー

韓国人大学生は感謝に対する応答ストラテジーとして、承認、相互感謝、喜びの表明、助けの意志の表明、恩返しの要求、不満の表明、頷きや微笑みなどの非言語行動といった「受けとめ」表現と、否定、謝罪、冗談、話題転換といった「否認」あるいは「ごまかす」表現をそれぞれ用いていた。各ストラテジーについて具体例をあげると、「受けとめ」に最も多く見られる承認とは、「응.(うん。)」、「그래.(はい。)」など、相手の感謝を素直に受け入れる表現を言う。次に、相互感謝とは、相手側からの感謝の言葉に再度感謝の言葉で対

応する場合で、相手に助けてもらったことに対する恩返しの際に頻繁に用いられている。「그때 도움이 많이 됐어.(あの時はとても助かったよ。)」、「네가 해 준 거에 비하면 아무것도 아니야.(君がしてくれたことに比べると何でもないよ。)」などがこれにあたる。喜びの表明とは、「도움이 됐다니 다행이야.(役に立ったなんてよかった。)」のように、自分の行動が相手側に役立ったことに対する喜びを表現するものである。なお、助けの意思の表明とは、相手側の感謝に対して今後も助けの意思があることを示す表現で、「다음에도 도움 필요하면 말해.(また助けが必要だったら言ってね。)」などがこれにあたる。一方、相手からの感謝に対して、依頼された内容が大変だったことを示す「진짜 힘들었어요.(本当に大変でしたよ。)」など、不満の表明によって自分の功を強調するストラテジーも見られる。親しい関係では、相手に施した恩恵に対して恩返しを要求するストラテジーも見られる。「한턱 쏴라~.(おごって～。)」など、お茶やご飯のご馳走を要求する表現が多い。「담에 니 차례.(次は君の番だよ。)」のように、恩返しの時期まで具体的に示した例もある。相手からの感謝に対して非言語行動で応答する場合も想定し、DCT の内容に「もし言葉にせずに態度で表現するならどのような態度をとるか書いてください。」という項目を設けて調査を行った。その結果、韓国人大学生は「미소(微笑み)」、「끄덕끄덕(相づち)」などの非言語行動を行っていると回答した。

一方、相手からの感謝を「否認」または「ごまかす」表現のうち、最も多く見られたのは否定である。自分が相手に施した恩恵は感謝されるほどではないと縮小あるいは否定するストラテジーで、「에이, 별 거 아니야.(大したことじゃないよ。)」などがこれにあたる。そのほか、「더 좋은 거 못 드려서 죄송합니다.(もっと良いものを差し上げられず申し訳ありません。)」のような謝罪表現も 1 人から見られた。さらに、「감사하면서 먹어라.(感謝しながら食べてね。)」、「이거 조공하는 거예요.(これ貢物だよ。)」といった冗談で言い返したり、「수고해~.(お疲れ様～。)」のように話題を切り替えるストラテジーも選択されている。

4.2 場面による分析

4.2.1 自分からの好意で恩恵を施した場合

相手から何も頼まれていないが、自分から好意を持って相手に物質的な恩恵を提供する状況を設定し、各場面を社会的地位(上、同、下)と親疎関係(親、疎)の側面から分析した。大学生の場合、物質的な好意は負担のない範囲で行うと想定し負担程度の軽い状況を設定

したため、負担程度による分析は省いた。

4.2.1.1　好意で贈り物をあげた場合

授業時間に自分より社会的地位の高い教授に旅行の土産で買ってきたお菓子を渡した状況を設定して調査を行った。この状況で韓国人大学生に多く選択されたストラテジーは、親疎に関係なく「承認＞否定＞非言語表現」の順であった。相手の社会的地位が自分より高い場合でも、韓国人大学生は「承認」のストラテジーを多く選択しているが、これはお菓子のように負担程度がそれほど大きくないということも要因として働いていると考えられる。

4.2.1.2　好意で食事をご馳走した場合

アルバイト代をもらって、親しい友人や後輩に好意で昼食をご馳走した状況で韓国人大学生に多く選択されたストラテジーは、「親しい友人」の場合は「承認(65%)＞恩返しの要求(20%)＞冗談(8%)＞非言語表現(5%)」の順で、「親しい後輩」の場合は「承認(88%)＞否定(5%)＞恩返しの要求、非言語表現(各 2%)」の順であった。

4.2.1.3　好意でお礼の食事をご馳走した場合

お世話になったあまり親しくない友人や後輩にお礼に昼食をご馳走する状況で、韓国人大学生は「承認＞相互感謝＞否定＞非言語表現」の順で感謝への応答ストテラジーを選択している。「相互感謝」の場合、他の場面では全く使われていないが、 主に相手に助けてもらったことに対する恩返しに限って制限的に用いられている。

4.2.2 相手からの依頼で助けてあげた場合

相手から頼まれて助けてあげた状況を設定し、社会的地位(上、同、下)、親疎関係(親、疎)、負担程度(大、小)のような社会的要因を考慮して質問を行った。自分より社会的地位の高い教授の依頼で助けてあげた場合、負担の大きい依頼を受けた場合は「否定(42%)」が、負担の小さい依頼については「承認(60%)」が、それぞれ最も多く見られた。一方、自分と社会的地位が同等の友人から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合[1]、親しい友人には「恩返しの要求(38%)」が、親しくない友人には「否定(50%)」が最も多く選ばれていた。なお、「非言語表現」は、負担が小さく親しくない間柄でより高くなっている。自分より社会的地位が低い後輩から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合、韓国人大学生に最も多く選択されているのは「承認」で、その次が「否定」のストラテジーであった。

---

[1] 同じ授業をとっている親しい友人、又はあまり親しくない友人に、英語資料の翻訳を助けてもらうという感謝場面を設定し、どのように応答したのか書いてもらった。後輩からの負担の大きい依頼も同じ場面を設定した。

5. 考察

DCT の分析結果、以下のことが明らかになった。

まず、＜感謝場面における韓国人大学生の応答ストラテジー＞の分析結果から見ると、韓国人大学生は「承認」、「否定」、「非言語行動」を感謝への応答として高い頻度で選択していた。「否定」は、相手の負い目を軽減または相殺することを目的に、自分の施した恩恵を縮小あるいは否認するために駆使するストラテジーである。김진무 (2013)ではこれについて韓国社会で美徳とされる「謙遜」が働いた結果であると述べている。また、軽い会釈や微笑みなどの「非言語表現」が「否定」に続いて頻繁に見られている。김영채 (2016)では、どのような状況で「非言語表現」が現れるのかについて、謙遜を示す場合もあるが、感謝の負担程度がごく軽くてあえて言葉で表現する必要がない場合、あるいは相手とあまり親しくないため、会話を発展させず終了するための手段としても使われていると述べている。今回の調査によると、負担程度の低い場合、非言語表現が頻繁に用いられているが、親しくないという設定については、話し手にとって「ソト」の人なのか、それとも全く他人の「ヨソ」の人なのかによって異なる可能性があるため、さらに深い分析が必要と考えられる。

次に、韓国人大学生では、自分と親しい関係にある友人や後輩に対しては、「恩返しの要求」のストラテジーが多く見られた。「恩返しの要求」は日本の人々にとって失礼に聞こえる可能性もあるが、金・呉(2020)でも述べたように、相手に負担の大きい依頼をして助けてもらった場合、日本では「助かりました！」など、相手側の役割を強調するお礼の言葉で十分だと認識する傾向があるのに対して、韓国では言葉だけでなく、食事をご馳走したり、後日に贈り物をするなど、物質的に恩返しをする傾向が強い。これを裏返すと、韓国では、「相手から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合」、相手への「恩返しの要求」はさほど失礼な行動ではなく、自然に受け入れられる程度の言語行動であると解釈できるだろう。なお、相手と親しくない場合や負担程度が低い場合は全く選択されておらず、親しい友人から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合のみ選択されたこのストラテジーは、韓国人大学生にとって、負い目のバランスを調整するためのポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして働いていることがわかる。

さらに、＜場面による分析＞においては、同じような場面や状況でも、社会的地位や親疎関係、負担程度といった社会的変因に応じて、ストラテジーがどのように変わるのかについて分析を行った。＜親しい友人や後輩に好意で食事をご馳走した場合＞、韓国人大学

生は、親しい友人には「恩返しの要求」と「冗談」を、親しい後輩には「承認」と「否定」のストラテジーをそれぞれ多く選択ている。この結果から、韓国社会では年齢などの上下関係が感謝への応答に影響していることがわかる。上下関係による使い分けは、「恩返しの要求」ストラテジーにも如実に現れる。親しい友人には「다음엔 네가 사라.(次は君がおごって。)」のように恩返しを要求するストラテジーが高い頻度で選ばれているが、親しい後輩に対しては「目上の人」というフッティング(footing) (Goffman, 1981)が働き、「恩返しの要求」は選択されておらず、その代わり、相手の感謝を軽く受け入れたり、相手への食事のご馳走はそれほど大したことではないという意味での「否認」のストラテジーが選択されている。一方、あまり親しくない友人や後輩に好意でお礼の食事をご馳走した場合、「承認」と「相互感謝」のストラテジーが多く見られる。なお、相手からの依頼で助けてあげた場合、「否定」のストラテジーを多く選んでいたが、負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合は、社会的要因に応じて異なるストラテジーを選択していた。例えば、自分より社会的地位の高い教授には親疎関係にかかわらず「否定」、親しい友達には「恩返しの要求」、親しくない友達には「否定」、後輩には「承認」と「否定」をそれぞれ高い頻度で選択している。即ち、目上の人に対しては、たとえ自分の負担が大きかったとしても、恩返しを要求するようなことはせずに、自分のパフォーマンスは大したことではないということを述べるなど、「謙遜」のストラテジーがとられている。一方、親しい友人に対しては格式ばったよそよそしい表現は用いられず、主に「밥 한 끼(ご飯一食)」、「차 한 잔(お茶一杯)」のように、相手側にそれほど大きな負担ではないと想定される物質的な補償を要求し、相手との関係に生じた不均衡を調整するためのストラテジーが選ばれていた。

＜引用文献＞

金明熙・呉恵卿(2020).「日・韓における大学生の感謝表現の比較研究」. 教育研究 62. pp.1-20.

Coulmas, F. (1981). Poison to your soul: Thanks and apologies contrastively viewed. In F. Coulmas(Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech* (pp.69-91): THE Hague: Mouton.

Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.

박은영(2000). 영어권 한국어 학습자와 한국어 원어민의 화행 실현 비교 연구- '사과'과 '감사응답'을 중심으로. 이화여자대학교대학원 석사학위논문.

김진무(2013). 감사 화행의 화용론적 분석. 프랑스문화예술연구 45. pp61-103.

김영채(2016). 한국어 감사 응답의 양상, 홍익대학교대학원 석사학위논문.

변우영(2007). 말뭉치의 교육적 활용에 관한 연구: 화행 분석을 중심으로. 한국어교육 18(2). pp135-154.